



令和8年度 果樹情報 第6号

(令和8年6月4日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (5月後半、果樹研究所)

平均気温は、第4半旬が21.0℃で平年より3.8℃高く、第5半旬が14.4℃で平年より3.5℃低く、第6半旬が22.1℃で平年より3.3℃高く経過しました。

この期間の降水量は53.5mmで平年比107%と平年並でした。日照時間は146.4時間で平年比124%と多く経過しました。

2 土壌水分 (5月31日現在、果樹研究所)

5月31日時点の土壌水分 (pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水) は、深さ20cmで2.6、深さ40cmで2.3、深さ60cmでは2.3となっており、概ね適湿状態です (図1)。

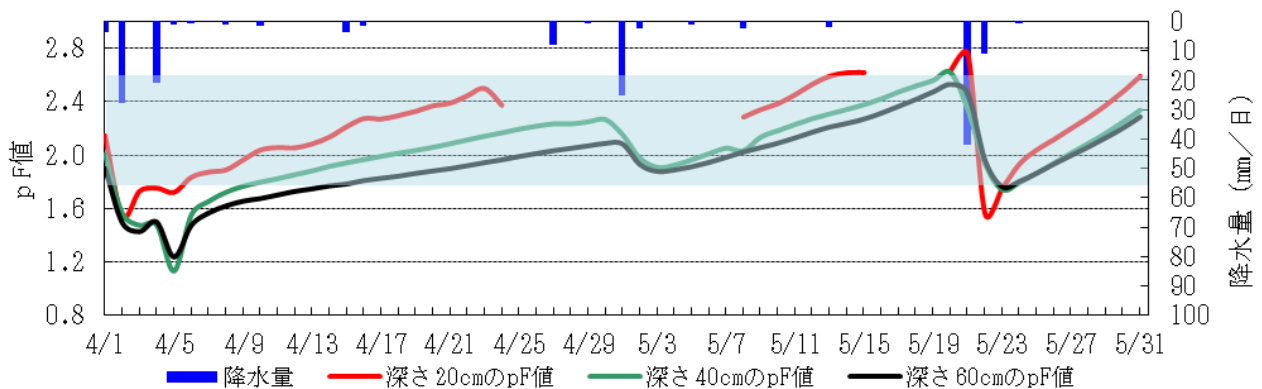


図1 土壌 pF 値の推移(果樹研究所なしほ場:草生・無かん水)
図中の網掛け部は、適湿の範囲 (pF1.8-2.6)

3 発育状況 (6月1日現在、果樹研究所)

(1) もも

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が45.0mm (平年比121%)、側径が40.6mm (平年比135%)、「ゆうぞら」は縦径が45.2mm (平年比121%)、側径が35.8mm (平年比128%)といずれの品種も平年よりかなり大きい状況です。

満開後日数で比較すると、「あかつき」は平年より大きく、「ゆうぞら」は平年よりやや小さくなっています。

イ 新梢生長

満開後50日における「あかつき」の新梢長は9.8cm (平年比100%)と平年並、展葉数は14.3枚 (平年比109%)とやや多く、葉色は平年よりやや濃くなっています (表1)。「ゆうぞら」は、新梢長は12.5cm (平年比117%)と平年より長く、展葉数は14.5枚 (平年比110%)と多く、葉色はやや濃くなっています。新梢はまだ停止していませんでした (表1)。

ウ 核障害の発生

満開後50日における「あかつき」の核障害発生は、核頂部亀裂が5.0% (平年42.5%)とかなり少なくなっています (表2)。

縫合面割裂は確認されていません。

エ 生育予測

果樹研究所における、発育速度 (DVR) モデルによる「はつひめ」の予測は、気象庁の気温予報を用いた場合は、硬核期開始日は6月2日ごろで平年より7日早く、収穫開始日は6月29日ごろで平年より6日早く、収穫盛期日は7月2日ごろで平年より6日早い見込みです (表3)。

果樹研究所における、発育速度 (DVR) モデルによる「あかつき」の予測は、気象庁の気温

予報を用いた場合は、収穫開始日は7月23日ごろで平年より6日早く、収穫盛期日は7月26日ごろで平年より6日早い見込みです（表4）。

なお、硬核期は近日中に開始の見込みです。

表1 ももの生育状況（満開後50日）

品種	新梢長(cm)			展葉数			葉色(SPAD)			新梢停止率(%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
あかつき	9.8	9.8	100	14.3	13.1	109	44.4	42.1	105	0.0	24.1	0.0
ゆうぞら	12.5	10.7	117	14.5	13.2	110	43.5	41.6	105	0.0	24.9	0.0

注) 平年は、1996～2025年の平均値

表2 ももの核障害発生状況（品種：あかつき、単位：%）

年	満開後日数	30日	45日	50日	55日	60日	65日	70日	75日	85日	95日	収穫果
2025	核頂部亀裂	12.5	20.0	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-
	縫合面割裂	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
2000 ～2025	核頂部亀裂	32.9	37.7	42.5	48.3	51.2	47.3	44.3	40.0	45.4	47.0	45.0
	縫合面割裂	0.1	0	1.3	2.9	11.0	21.9	26.6	24.4	33.5	36.6	25.5

注) 平年は、2000～2025年の平均値

表3 もも「はつひめ」の発育予測日 [予測方法：発育速度（DVR）モデルによる発育予測]
（果樹研究所：6月1日現在）

発育予測	観測日		気象予報	今後の気温経過		
	昨年	平年		平年並	2℃高い	2℃低い
硬核期開始日	6月7日	6月9日	6月2日	6月2日	6月2日	6月2日
収穫開始日	6月30日	7月5日	6月29日	6月29日	6月29日	6月29日
収穫盛期日	7月4日	7月8日	7月2日	7月2日	7月2日	7月2日

注1) 平年は2010～2025年の平均値

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温（3～4週目の平均気温）を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値

注3) モモ「はつひめ」の発育予測は誤差を生じる場合があることに留意する

表4 もも「あかつき」の発育予測日 [予測方法：発育速度（DVR）モデルによる発育予測]
（果樹研究所：6月1日現在）

発育予測	観測日		気象予報	今後の気温経過		
	昨年	平年		平年並	2℃高い	2℃低い
収穫開始日	7月25日	7月29日	7月23日	7月23日	7月22日	7月23日
収穫盛期日	7月29日	8月1日	7月26日	7月26日	7月26日	7月27日

注1) 平年は1996～2025年の平均値

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温（3～4週目の平均気温）を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値

注3) モモ「あかつき」の発育予測は誤差を生じる場合があることに留意する

(2) なし

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が25.2mm（平年比110%）、横径が30.3mm（平年比116%）、「豊水」は縦径が27.6mm（平年比110%）、横径が30.5mm（平年比116%）と、いずれの品種も平年より大きい状況です。

満開後日数で比較すると、「幸水」は平年よりやや小さく、「豊水」は平年並です。

イ 新梢生長

満開後 40 日における「幸水」の予備枝新梢長は 55.3 cm (平年比 97%) と平年並、不定芽新梢長は 51.9 cm (平年比 93%) と平年よりやや短くなっています。予備枝新梢の葉枚数は 18.3 枚 (平年比 103%) と平年並です (表 5)。

満開後 40 日における「豊水」の予備枝新梢長は 55.1 cm (平年比 85%)、不定芽新梢長は 49.4 cm (平年比 86%) といずれも平年より短い状況です。予備枝新梢の葉枚数は 18.3 枚 (平年比 102%) と平年並です (表 5)。

表 5 なしの新梢生長 (満開後 40 日)

品種	予備枝新梢長(cm)			不定芽新梢長(cm)			予備枝葉数(枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	55.3	57.1	97	51.9	55.6	93	18.3	17.8	103
豊水	55.1	64.9	85	49.4	57.7	86	18.3	18.0	102

注) 平年値：新梢長は 1996～2025 年、葉枚数は 1998～2025 年の平均

(3) りんご

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が 37.4 mm (平年比 120%)、横径が 35.3 mm (平年比 110%)、「ふじ」は縦径が 34.6 mm (平年比 117%)、横径が 30.7 mm (平年比 111%) といずれの品種も平年より大きい状況です。

満開後日数で比較すると、「つがる」は平年並、「ふじ」は平年よりやや小さくなっています。

イ 新梢生長

満開後 40 日における新梢長は、「つがる」が 14.4 cm (平年比 71%)、「ふじ」が 14.4 cm (平年比 72%) でいずれの品種も平年よりかなり短い状況です (表 6)。新梢停止率は、「つがる」が 91.7%、「ふじ」が 100%でした (表 6)。

ウ 結実状況

目通り付近の中心果結実率は、「つがる」が 95.8%、「ふじ」が 94.2%であり、結実は良好です (表 7)。

表 6 りんごの新梢長及び新梢停止率

品 種	満開後 日数	新梢長(cm)				新梢停止率(%)	
		本年	昨年	平年	平年比	本年	昨年
つがる	20	11.0	11.3	13.1	84	13.9	6.7
	30	13.3	17.2	18.1	74	55.6	70.0
	40	14.4	19.7	20.4	71	91.7	86.7
ふじ	20	13.4	13.7	15.7	85	52.8	13.3
	30	13.9	18.0	19.2	72	88.9	51.7
	40	14.4	19.8	20.0	72	100.0	96.7

注) 新梢長平年値は、1996～2025 年の平均値

供試樹：「つがる」/M.26/マルバカドウ 20 年生

「ふじ」/マルバカドウ 23 年生

表 7 りんごの結実状況

品 種	結実果そう率(%)			中心果結実率(%)		
	本年	昨年	平年	本年	昨年	平年
つがる	100	99.7	90.7	95.8	96.1	92.2
ふじ	100	100	86.1	94.2	85.3	77.6

注) 平年値は、結実果そう率では 2005～2025 年の平均値

中心果結実率では 1998～2025 年の平均値

供試樹：「つがる」/M.26/マルバカドウ 20 年生

「ふじ」/マルバカドウ 23 年生

(4) ぶどう

ア 新梢生長

発芽後 40 日における「巨峰」の新梢長は 78.7 cm (平年比 129%) と平年より長く、展葉数は 10.2 枚 (平年比 109%) と平年より多い状況でした (表 8)。

イ 開花状況

開花始めは、「巨峰」は 5 月 28 日で平年より 6 日早く、「あづましずく」は 5 月 27 日で平年より 7 日早く、「シャインマスカット」は 5 月 31 日で平年より 7 日早くなりました (表 9)。

表 8 「巨峰」の新梢生長

発芽後 日数	新梢長 (cm)			展葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
40	78.7	61.2	129	10.2	9.4	109

注) 平年値は 2006～2025 年の平均

表 9 ぶどうの開花日

品 種	開花始め			満開		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
巨 峰	5 月 28 日	6 月 3 日	6 月 4 日	6 月 1 日	6 月 7 日	6 月 8 日
あづましずく	5 月 27 日	6 月 3 日	6 月 4 日	5 月 31 日	6 月 8 日	6 月 8 日
シャインマスカット	5 月 31 日	6 月 6 日	6 月 7 日	未	6 月 11 日	6 月 11 日

注) 平年値：「巨峰」は 1998～2025 年、あづましずくは 2004～2025 年、「シャインマスカット」は 2009～2025 年の平均

4 栽培上の留意点

(1) 共通

ア かん水

5 月から夏期にかけて果樹園からの 1 日当たりの蒸発散量は、晴天日で 6～7 mm、曇天日で 2～3 mm、平均で 4 mm 程度のため、1 回のかん水は 25～30 mm 程度 (10 a 当たり 25～30 t) を目安とし、5～7 日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1 回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

イ 草刈り、マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう (地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされます)。

また、刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

ウ 降ひょうの事後対策

令和 8 年 5 月 13 日、14 日に、一部地域で降ひょうがありました。被害が見られる地域では、以下の点に注意して管理を行いましょう。被害を受けていない園地については、(2) 以降を参考にしてください。

なお、令和 8 年 6 月 3 日発行の農業技術情報第 5 号「降ひょうが発生した農作物の技術対策」も参考にしてください。

(URL : <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/748881.pdf>)

(ア) 着果管理

着果量は果実や樹体の損傷程度を勘案し、総合的に判断しましょう。被害程度の軽微な果実は適宜残して、樹勢をコントロールしましょう。

(イ) 病害虫防除

降ひょうにより枝葉や果実に傷がつき、病原菌が侵入しやすくなっているため、被害の多少に関わらず、防除指針及び各地域の防除暦に従い速やかに薬剤散布を実施しましょう。なお、散布は枝幹内部まで薬液が届くように丁寧に行いましょう。

(ウ) その他

樹勢が極端に低下した樹では、降雨や高温時を避けて葉面散布を実施しましょう。

(2) もも

ア 仕上げ摘果

果樹研究所における本年の「あかつき」の硬核期開始は近日中と見込まれます。仕上げ摘果が完了していない園地では速やかに実施しましょう。

双胚果や核障害の発生は、園地や品種によって異なるので、仕上げ摘果前には園内の状況を確認した上で作業に当たります。発生が多い場合は、着果量をやや多めに残し、障害が明らかになる硬核期終了後に修正摘果で適正着果量とします。

イ 樹勢回復対策

樹勢が弱い樹は早めの摘果を心がけ、着果数を制限し新梢生育を促しましょう。また、土壤の乾燥が続く場合はかん水の実施や樹冠下マルチが有効となるので適宜実施しましょう。

ウ 袋かけ

袋かけを必要とする品種では、仕上げ摘果終了後に速やかに袋かけを行いましょ。

エ 収穫前準備

各園地及び品種ごとに果実の成熟に十分注意し、枝吊りや支柱の設置、夏季せん定及び反射シート設置等の収穫直前の管理作業は、時期が遅れないよう計画的に実施しましょう。

(3) なし

ア 着果管理

仕上げ摘果は、満開後 50～60 日までに実施しましょう。樹勢の低下や果実肥大の鈍化が観察される場合には、新梢停止期前（満開後 60～70 日）に小玉果を中心に摘果し、適正着果量に調整しましょう。

イ 新梢管理

「幸水」で副芽枝（果そう葉）新梢の飛びだしが多い場合はこれを摘心します。副芽枝を摘心する場合は、側枝基部 20～40 cm 程度を目安とし、ロゼット状の基部葉とその上位 2～3 節を残して摘心を行うと果実肥大と花芽形成に効果が期待できます。

「豊水」では、満開後 60 日ごろに新梢伸長が緩慢となる予備枝は、翌年の果実肥大と果形が良いので、直ちに誘引を開始しましょう。

また、下垂や枝越しとなった新梢は方向を修正するとともに、側枝先端部の新梢が倒れた場合には立てるように誘引し、受光体制や薬剤の通りを良好にしましょう。

(4) りんご

ア 着果管理

仕上げ摘果は満開後 60 日までに実施しましょう。摘果の程度は、「つがる」が 3 頂芽に 1 果（1 果当たりの必要葉枚数 45 枚）、「さんさ」、「シナノスイート」、「陽光」、「王林」、「ふじ」が 4 頂芽に 1 果（必要葉枚数 60 枚）を目安とし、最終着果量の 1～2 割増しとします。果形や肥大状況等をよく観察しながら丁寧に実施しましょう。小玉果、変形果、サビ果、傷果、病害虫の被害果、果台の長い果そうの果実、果そう葉の少ない果そうの果実、長果枝の果実などを摘果し、形質の良い果実を残します。仕上げ摘果の遅れは花芽分化率低下の原因となるため、注意が必要です。結実の少ない園地では着果数の確保を優先し、著しい不良果そうを対象に最小限度の摘果を行いましょ。

なお、「つがる」は、大玉果にすると日持ちが悪くなるので、中玉生産を目標に摘果を実施しましょう。「陽光」はサビの発生状況をよく確認して摘果しましょう。「王林」は樹勢が落ち着くと花芽着生が多く着果数が多くなりやすいので仕上げ摘果を徹底しましょう。

イ 新梢管理

主枝や亜主枝（骨格枝）の基部付近の背面から発生した徒長枝をせん除し、日当たりを確保するとともに薬剤の通りを良くしましょう。

(5) ぶどう

ア 摘粒

1 回目のジベレリン処理後、実止まりが確認されしだい、穂軸長の調整と予備摘粒を実施しましょう。「巨峰」の穂軸長は 7 cm 程度を目安に上部の支梗を切り下げます。予備摘粒は 2 回目のジベレリン処理までに内向き果、小果、傷果等を取り除きます。

2 回目のジベレリン処理が終了しだい、仕上げ摘粒を開始しましょう。果房の内部に入り込み

そうな果粒や突出した果粒、密着しすぎている箇所を整理します。さらに、最上段の支梗には上向きの果粒を残し、穂軸を囲むように配置すると果房の仕上がりが良くなります。

仕上げ摘粒は、時期が遅れると果粒同士が密着し、作業性が低下するとともにハサミによる傷果の発生も多くなるため、果粒肥大の早い品種から計画的に作業を進めましょう。また、摘粒では、果房に触れず穂軸を持って作業し、果梗は基部から切り落とすよう心がけましょう。

イ 摘房

着果過多は着色不良を招くため摘房を実施しましょう。早めの摘房は、養分の浪費を防ぎ、果実品質向上の効果があります。摘房は、果粒肥大の揃いが悪い果房等を中心に実施します。収量を確保するため果房数を多く残しがちですが、品質の良い果実を生産するため、適正な着房数管理に心がけましょう。

ウ 新梢管理

実止まりが確認されしだい、特に強勢な新梢や混み合っている部分の新梢を整理し、棚面の明るさを確保しましょう。また、伸び続けている副梢は2～3葉残して摘心しましょう。

5 病害虫防除上の留意点

(1) 病害

ア リンゴ褐斑病

5月中下旬の本病の発生ほ場割合は、全域で平年並でした（5月28日付け害虫発生予察情報発生予報第3号）。

落花30日後頃は本病の子のう胞子の飛散盛期であり、重要防除時期にあたるため、アントラコール顆粒水和剤 500倍を使用しましょう。

イ リンゴ腐らん病

梅雨期は感染拡大のおそれがあるため、発生状況をよく観察し、発病部位は徹底して取り除きましょう。摘果後に果柄が残っている場合、そこから病原菌が侵入するため、仕上げ摘果の際は、離層形成部位から摘果するように心がけましょう。

ウ モモせん孔細菌病

梅雨期に入り降水量が多くなると、感染が増加するおそれがあるため引き続き注意が必要です。病原細菌は降雨で拡散するため、防除対策はできるだけ降雨前に実施しましょう。

薬剤防除は、気象情報に留意しながら降雨前の予防散布を基本に10日間隔で実施しましょう。ただし、早生種では収穫前日数に十分注意し、使用する薬剤を選択してください。

新梢葉が茂り、春型枝病斑を見つけにくい状況ですが、春型枝病斑の発生は7月ごろまで長期間にわたるため、見落としがないよう丁寧に樹冠内部まで確認してください。

発病部位の取り残しは被害拡大につながるため、発病した枝、葉、果実などは見つけしだい取り除き、密度低減に努めましょう。特に、樹冠上部での発生を見逃さないように注意し、直下への被害拡大を防止しましょう。

また、発生拡大が懸念される場合は速やかに袋かけを行いましょう。

エ モモホモプシス腐敗病、灰星病

梅雨期はホモプシス腐敗病の重点防除期であるため、伝染源となる芽枯れや枝枯れが確認される場合は、せん除し適切に処分してください。

また、灰星病も梅雨期が重点防除期であり、本病は果実の成熟とともに感染しやすくなるため、伝染源となる花腐れを除去するとともに、6月中旬以降に両病害に防除効果の高い薬剤を使用しましょう。

オ ナシ黒星病、輪紋病

5月下旬の黒星病の発生ほ場割合は昨年よりも高く、果実での発生が広域的に確認されており（5月29日付け病害虫防除情報）、今後の発生拡大が懸念されます。梅雨期に入り降水量が多くなると、感染が増加するおそれがあるため引き続き注意が必要です。特に、「幸水」では満開後50日頃から本病に対する果実の感受性が高まり、重要防除時期にあたるため、防除対策を徹底しましょう。

防除対策は、果そう基部や葉・果実等の罹病部位を徹底して除去するとともに、薬剤散布は気

象情報に留意し、降雨前の予防散布を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意しましょう。なお、散布の際はむらがないように十分な量を使用しましょう。新梢発生が旺盛となる時期なので、薬剤散布前には新梢管理を行い、枝葉の混雑による散布むらをなくしましょう。

また、輪紋病も梅雨期が重点防除期にあたるため、6月上旬から両病害に効果がある殺菌剤を十分量散布してください。多発が予想される場合は、梅雨明けまで7日間隔で散布を行いましょう。

カ ブドウ晩腐病

開花～袋かけ前の時期は本病の重点防除期にあたるため、降雨前の散布を徹底しましょう。併せて、耕種的防除対策として、幼果期の散布後にカサ掛けを行いましょう。

なお、果面の汚れを防ぐため、袋かけが終了するまで展着剤は加用しないように注意しましょう。

(2) 虫害

ア モモハモグリガ

第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、5月6半旬頃と予測され、第2世代の防除適期は6月1半旬頃と推定されます(表10)。

本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意しましょう。

イ ナシヒメシンクイ

第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合には、6月2半旬ごろと予測され、第2世代幼虫の防除適期は6月4半旬ごろと推定されます(表10)。

本種の第1世代幼虫は、主にもも等の核果類の新梢に寄生(芯折れ症状)し、第2世代以降はなしなどの果実に移行します。例年、なしでの果実被害が多い地域では、近隣のもも等における防除も徹底しましょう。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守します。

ウ モモノゴマダラノメイガ

被害が発生しているモモ園では、他のシンクイムシ類との同時防除も含め、生育に合わせて6月上旬ごろから10日間隔で2～3回防除を行います。被害果実は見つけしだい摘除し、5日間以上水漬けにするか、土中深く埋めてください。また、前年に被害が多発した園地では袋かけを早急に実施しましょう。

エ ナシマルカイガラムシ

ナシマルカイガラムシの第1世代のふ化盛期は、気温が2℃高く推移した場合、6月2半旬頃と予測されます(表10)。カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除しましょう。ただし、1回の防除では十分でないため、散布後1週間から10日後に再度防除すると効果的です。

オ ハダニ類

ハダニ類の発生状況をよく確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)の密度になったら速やかに防除を行いましょう。

カ カメムシ類

病虫害防除所のフェロモントラップ調査における4月1半旬～5月4半旬の果樹カメムシ類の越冬世代の誘殺数は、一部地域で平年より多い状況でした(令和8年5月25日付け)。

越冬世代成虫による加害は幼果期から始まる場合があるので、特に山沿いの園地ではカメムシ類の飛来状況をよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行いましょう。

表 10 果樹研究所における防除時期の推定（令和 8 年 5 月 29 日現在）

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第 1 世代 誘殺盛期	第 2 世代 防除適期	第 1 世代 誘殺盛期	第 2 世代 防除適期	第 1 世代 ふ化開始	第 1 世代 ふ化盛期
2℃高い	5 月 27 日	6 月 1 日	6 月 10 日	6 月 19 日	5 月 28 日	6 月 6 日
平 年 並	5 月 27 日	6 月 1 日	6 月 13 日	6 月 23 日	5 月 28 日	6 月 8 日
2℃低い	5 月 27 日	6 月 2 日	6 月 17 日	6 月 29 日	5 月 28 日	6 月 11 日

起算日：モモハモグリガ越冬世代誘殺盛期 4 月 14 日

ナシヒメシンクイ越冬世代誘殺盛期 4 月 16 日

ナシマルカイガラムシ 3 月 1 日（演算方法は三角法）

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

福島県農薬危害防止運動を実施中

■農薬使用基準の遵守 ■農薬飛散防止対策の徹底 ■住宅地等における農薬適正使用の推進

実施期間：6 月 10 日から 9 月 10 日まで。農薬による事故等の未然防止に努めましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

(以下の URL より他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>